



## イギリス科ニュースレター No. 13 / October 2006

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科  
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (9号館323号室)  
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)  
E-Mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp  
Home Page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp>



### コミプラ完成

安西信一(主任)

この10月、旧駒場寮のあった辺りに建設中のコミュニケーション・プラザ(通称「コミプラ」)が完成し、記念行事も行なわれた。図書館、生協売店、食堂が、芝生の中庭を囲み、宿泊可能な和風の建物など様々な施設も付く。テーブルやベンチの置かれた美しい中庭で寛げば、駒寮の頃を知る者には隔世の感があろう。駒場にかくも大きな庭を組み込んだ空間が設計されるのも画期的だが、全体は鹿島建設とのコラボレーションによる産学の共同作業によっており、食堂には民間のイタリアン・トマト(「イタトマ」)も入っている。社会に開かれているという意味でも画期的だろう。むしろ単に、東大もやっと普通の大学並みになったに過ぎないともいえようが。

全体の様式は、流行の「浮遊」的、ないし「透層」(伊東豊雄)的な建築である。渋谷近辺としては例外的に豊かな駒場の自然、環境(ミリュウ)を内に吸収するかのような、多孔的構造を持っている。囲まれた中庭もまた、緩やかに開かれた庭であり、その軸線の一つが銀杏並木の延長線上に、別の軸線が古い101号館の前の小道と連続する。注目すべきは、古い駒寮の残骸(?)を部分的に再利用し、或る種の人工廃墟(シャム・ルーイン)を造って中庭に置いた点だろう。中庭には他にも、古くからの樹木が残され、歴史やコ

### 新任のご挨拶 Introductory Statement

Dr Bernard Wilson

Thank you to the British Studies Section for allowing me to introduce myself. I am an Australian who has worked in universities in Singapore, Hong Kong and Japan over the last twelve years. I specialize in literature, film, culture and gender studies and my experience, publications and interests are in the following areas: twentieth and twenty-first century cultural, literary and linguistic theory; English-language text and film, most particularly Pacific Rim and Asian Anglophone literature in the areas of post-colonialism and film as related to East-West interaction and gender representation, but also in areas of Modernist and Postmodernist literature. I'm also very interested in children's literature, film and animation – something I get a lot of practice in analyzing because of the time I spend with my six-year-old son and four-year-old daughter!

My doctoral thesis, completed at the Flinders University of South Australia, was entitled "Belonging: Language, Self and Nation" and worked through a range of cultural and linguistic theoretical positions in relation to Southeast Asian English-language prose fiction over the last fifty years. In terms of other research, I am at present working on a book entitled *Zen and the Art of Cultural Cliché: Some Contemporary Cinematic Pilgrimages to Japan*, which details and analyzes a range of Western cinematic interpretations of Japan and is in part based on a recent presentation I gave at the University of Tel Aviv. My interest in children's literature and film has also led me to researching and writing on aspects of traditional fairy tales and folklore and on contemporary children's cinema. I am delighted to be working at the University of Tokyo and am looking forward to many engaging conversations with students and colleagues in the British Studies Section.

ンテクストを重視するポストモダンの手法が随所に顕示される。アレックス・カーによって「巨大派」と揶揄された京

都駅ビルの作者、原宏司による先端研とは、また違った新しい名所が駒場キャンパスに生まれたわけだ。

まずは、この美しく快適な空間の誕生をことほごう。対照的なのが、5、7、8、9号館など、絵に描いたような古い機能主義的モダニズムの建物である。老朽化したこれらの建物は、今、耐震補強工事やアスベスト撤去等がなされ、再生しつつある(こうした再利用自体、時流に与するものともいえよう)。今回出来た「浮遊」的なコンプラもまた、数十年後には、浮ついた空虚な時代の遺物として、破壊／改装されるのだろうか。それを見つめるのも、楽しみではある。

個人的には、中庭のテーブルやベンチが少ないという文句があるのだが、ともかくもこうした西洋風フォーラムのような空間を立ち上げたことに敬意を表したい。東大側には、この種の公共空間への抵抗感があったのではないかと想像されるからだ。何しろ駒場寮の地霊がうごめいている場所なのだから(テーブルやベンチが少ないのは、あるいは潜在的恐怖の表れ?)。もちろんこの空間にしても、何重にも内向きに開かれたものに過ぎない。中庭は四方を囲われることで、安全で閉ざされた(内輪的な)場を保証してくれる。その意味で、表参道ヒルズなどに典型的な昨今の「アトリウム症候群」(太田浩史)とも通ずるものを感じる。そもそも駒場キャンパス自体、極度に閉鎖的・排他的な空間でしかない。建築家の槇文彦は、東大のキャンパスが閉鎖的なのは、加賀藩の屋敷を利用したせいだとしたが、それだけの理由ではなからう。こ

の浮遊空間が、富ヶ谷や松濤、渋谷の街にまで流出する日は来るだろうか。

イギリス科教員の語るイギリス

## To warm a chilly climate

アルヴィ宮本なほ子

「イギリス科教員の語るイギリス」というコーナーは、イギリス以外の場所でも差し支えないということでしたので、少々強引ですが、OxfordのBeriol Collegeをモデルにして1963年にRobertson Daviesを初代の学寮長として創設されたTorontoのMassey Collegeのことを書きます。このカレッジは、大学院生(Junior Fellow)と研究者だけの小さな学寮で、91年に私が行った時は定員60名。カナダ人と留学生、男女の割合を大体半々にする方針で学生を取っていました。「平等」の理念と(中世のイギリスでもないのに)夕食の時はガウン着用で“Benedicimus tibi…”とラテン語のお祈りをするような古色蒼然とした伝統の演出のバランスが、最初の頃は非常に面白く感じられ、「平等」に関するCanadianaの収集を密かに始めたのですが、それは、トロントでは一般的に女性研究者が少ない哲学科のスタッフの半数以上が女性だという発見で熱を帯び、80年代後半にトロントの哲学科は“chilly climate”を暖めすぎたことを教えてもらって、さらに拍車がかかったのです(今後は女性しか採用しないと宣言して、違憲判決を受けた)。

カレッジの中の“chilly climate”の改善で印象的だったのは、90年に女性で初めて学寮長になったAnn Saddlemyerが就任直後に行った改革の一つ、ラテン語のお祈りの中の「創造主」の中性

化です。このエピソードを書くにあたって、細部に関する問い合わせをしたら、Saddlemyer本人から返事が来ました。

*I recall the incident very well. The grace had been used since Robertson Davies devised it in the 1960s but was not inclusive of faiths or gender. So I had a committee of Junior Fellows work on it, and then asked the President of St Michael's James McConica to smooth it over, then it went to a professor of Classics who translated it back into Latin (after a poll of the JFs who wanted to keep it in Latin!). John Fraser has since reworked it I believe. The chapel prayer was altered by one of our JFs who was in Divinity, to become more inclusive, but although it was printed out, the board in the chapel was unchanged when I left. I believe John F may have reworked that one!*

John FraserはSaddlemyerの後任の現在の学寮長です。Masseyのチャペルは、宗派を超えて礼拝ができるnondenominationalなもので、非常に進歩的でしたが、その一方で創立時のカレッジは(公式の場は)女人禁制でした。Saddlemyerと当時のJunior Fellowsがやったことは画期的ですが、しかし、Saddlemyerからの返事を読むと、変革には揺り戻しがつきもので、それなりの時間がかかることがわかります。

## 11月11日(土)は ホームカミングデーです

イギリス科研究室(9号館320&323号室)では、卒業生の皆様のおいでをお待ちしております。どうぞお立ちよりください。(公式スケジュールでは15:10-16:40が個別研究室訪問の時間になります。)